

新版『資本論』第1巻講座 第3講：貨幣とは何か

主催：千葉県学習協会

ところ：千葉県自治体福祉センター

日時：2022年8月21日（日）午後1時～5時

講師：萩原伸次郎（横浜国立大学名誉教授）

第2章 交換過程

マルクスは、商品所有者を登場させ、商品交換を試みるなかで貨幣の発生を歴史的に論じる。商品所有者が出現すると、価値形態論で論じた関係とどう異なる事態が発生するのか？

商品所有者の「諸人格は、ここではただ、互いに商品の代表者としてのみ、だからまた商品所有者としてのみ、存在する」（新版①151 頁、新書版①144 頁、原文 99～100 頁）。

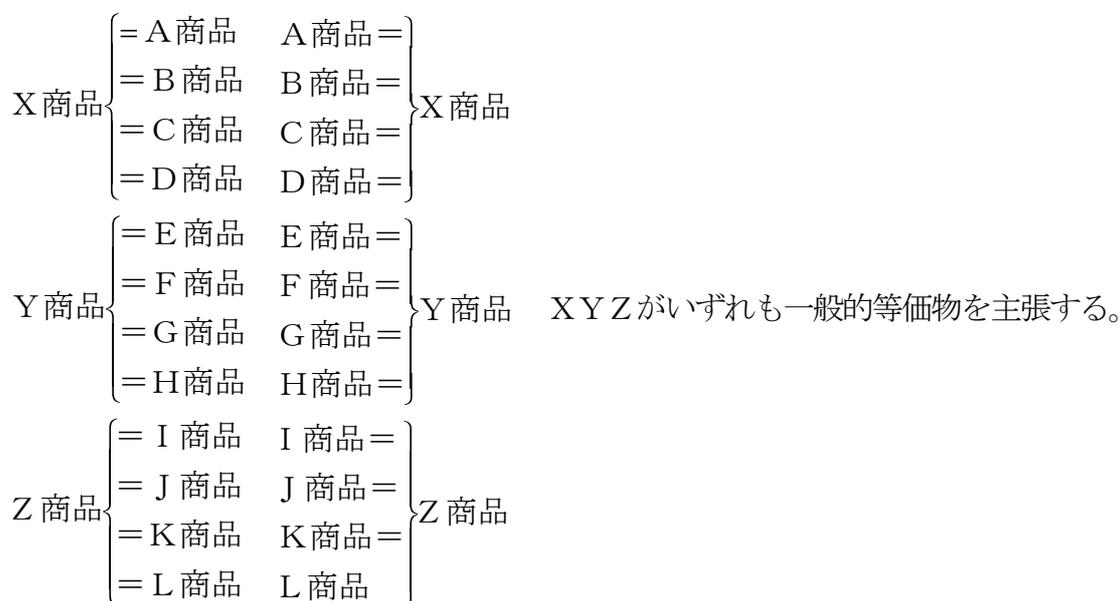
この商品関係は、言うまでもなく、物々交換における商品である。商品所有者を登場させない、価値形態論では、「商品にとっては他のどの商品体もそれ自身の価値の現象形態としての意義しか持たないという事情である」（新版①152 頁、新書版①145 頁、原文 100 頁）。「商品それ自体は、どんな商品であろうと交換しても構わないということになる。けれども商品所有者が登場すると違った事情が生じるのだ。

商品所有者は、自分を満足させる使用価値を持つ商品と引き換えに譲渡しようとするのであり、また、同時に価値として実現しなければならない。つまり、自分を満足させる使用価値を持つ商品と同時に、自分の商品と同等の抽象的人間労働を含むだろう商品との交換を望む。けれども自分を満足させる使用価値を持つ商品を所有する商品所有者が、自分の商品を好み、しかも、自分の持つ商品と同等の抽象的人間労働を含むと思うかどうかは、わからない。全くの偶然がこれを支配する。

「どの商品所有者も自分の欲求を満たす使用価値を持つ別の商品と引き換えにでなければ自分の商品を譲渡しようとはしない。・・・他面、彼は自分の商品を価値として実現しようとする。自分の気に入った、同じ価値を持つ他のどの商品でも価値として実現しようとする」（新版①154 頁、新書版①147 ページ、原文 101 ページ）しかし、全ての商品所有者がこれを同時におこなうことはできないだろう。つまり、物々交換は、商品所有者同士が、相手の商品の使用価値を望むと同時に、その商品が同じ価値をもつことを望むから、交換の成立はきわめて難しい。相思相愛が結婚の成立条件だとすれば、それが容易に成立しない場合があるのと類似しているのかも？

すべての商品所有者が、「全体的な、または展開された価値形態」から「一般的価値形態」への転換を試みたとすれば、すべての商品所有者が同じことをおこなうのだから、どの商品も一般的等価物ではなくなってしまう。価値形態論では、論理だけで議論したので、

簡単に貨幣が誕生したけれども、現実社会では難しいということ。それを図で示すと次のようになる。



したがって一般的相対的価値形態も実現することはない。だとすれば、X、Y、Z・・・から特定のある商品を社会的な行為によって一般的等価物にしなければならない。この排除された特定の商品が、貨幣となるのである。交換過程の必然的産物として貨幣が生まれるということである。(新版①155 頁、新書版①148-9 ページ、原文 101-2 ページ)

物々交換の社会→「商品交換は、共同体の終わるところで、諸共同体が他の諸共同体または、他の諸共同体の構成員と接触する点で、始まる。」(新版①157 頁、新書版 150 頁、原文 102 頁)。交換が繰り返されることにより、交換目当ての生産となり、「習慣はそれらの物を価値の大きさとして固定させる」(新版①157 頁、新書版①150-1 ページ、原文 103 ページ)

一般的等価形態がかわるがわる、一時的に特定の商品に帰着する。→貨幣の発生
具体的にどんなものが貨幣になったのだろうか？ マルクスは 2 つ挙げる。「外部から入ってくるもっとも重要な交易品」か「内部の譲渡されうる所有物の主要要素をなす使用対象、たとえば、家畜」しかし、次第に貨幣は、貴金属に移っていく。なぜか、「一般的等価物という社会的機能に生まれながらにして適しているから」(新版①159 頁、新書版①152 ページ、原文 103-4 頁)

価値表現の材料として、貴金属は均質であり、量的な区別が可能である。

交換過程が、貨幣に転化する商品にその独特な価値形態、すなわち一般的等価形態という形態を与える。

貨幣の価値は、それ自身で量ることができず、他の諸商品によって量る。貨幣の原産地

での直接取引のなかでおこなわれる。(新版①164 頁、新書版①157 頁、原文 106-7 ページ)

貨幣の魔術はどこから生じるか? 「一般等価形態がある特殊な種類の自然形態に癒着したとき、あるいは貨幣形態に結晶したとき、・・・他の商品がその価値を一商品によって全面的に表示するので、その商品ははじめて貨幣になるのだとは見えないで、むしろ逆に、その商品が貨幣であるからこそ、他の商品はその商品で一般的にそれらの価値を表示すかのように見える」(新版①166 頁、新書版 158-9 ページ、原文 107-8 ページ)

第3章 貨幣または商品流通

第1節 価値尺度

金を貨幣商品として前提。

金の第一の機能→「商品世界に価値表現の材料を提供すること」

「価値尺度という機能においては、貨幣は、ただ表象されただけの、または観念的な貨幣として役立つのである」(新版①169~170 頁、新書版①163 ページ、原文 111 ページ)

貨幣の度量基準とは、何か? 諸商品価値を、その度量単位としてのある固定された分量の金に関連づける必要が技術的に生じる。そしてさらに、その度量単位の更なる可除部分に分割し、度量基準に発展する。重量の度量基準が貨幣の度量基準の最初の呼称となる可能性が高い。

貨幣の価値尺度機能と価格の度量基準とはまったく異なる機能である。価値の尺度は、諸商品が価値として量られることを意味するが、価格の度量基準は、金の諸分量をある金分量によって量るきわめて技術的な機能である。

金の価値変動は、まず価格の度量基準としての金の機能を損なわせることはない。12 オンスの金は、金にいかなる価値変動があったとしても、1 オンスの 12 倍の価値をもつ。金の価値変動は、また金の価値尺度の機能も損なわせることはない。「商品価値が全般的に上昇しうるのは、貨幣価値が変わらなければ、商品価値が上がる場合だけ、商品価値が変わらなければ、貨幣価値が下がる場合だけである。逆に、商品価値が全般的に低下しうるのは、貨幣価値が変わらなければ、商品価値が下がる場合だけ、商品価値が変わらなければ、貨幣価値が上がる場合だけである」(新版①175 頁、新書版①168 ページ、原文 114 ページ)

たとえば、 a 量の商品 $A = x$ 量の金としよう。貨幣価値が変わらず、商品価値が 2 倍になれば、 $(1/2)a$ 量の商品 $A = x$ 量の金だから、 a 量の商品 $A = 2x$ 量の金と表わすことができる。商品価値が変わらず、貨幣価値が 2 分の 1 になれば、 a 量の商品 $A = 2x$ 量の金と表わすことになる。また、 a 量の商品 $A = x$ 量の金とし、貨幣価値が変わらず、商品価値が 2 分の 1 になれば、 $2a$ 量の商品 $A = x$ 量の金だから a 量の商品 $A = (1/2)x$ 量の金と表わすことができる。商品価値が変わらず、貨幣価値が 2 倍になれば、 a 量の商品 $A = (1/2)x$ 量の金と表わすことができる。

金属重量の貨幣名は、最初の重量名からしだいに離れる。なぜか（1）外国貨幣の流入（2）低級な貴金属が高級な貴金属に取って代わる（3）王侯による貨幣変造
貨幣の度量基準は、最終的には、法律によって決定される。ポンド、シリング、ペニーなどの誕生。価格表示は、完全に重要から離れ、法律の定める価格の度量基準にしたがってなされる。1クォーターの小麦=3ポンド 17シリング 10.5ペンス

商品の価値が、すなわち社会的労働時間が、正確に価格に反映されるとは限らない。「価値の大きさから価格が背離する可能性は、価格形態そのもののうちにある。」そればかりではない。価格がそもそも価値表現であることを止めるに至るほどの矛盾が存在する。「良心、名誉などが、その所有者によってカネで売られるものとなり、こうしてその価格を通して商品形態をもつことがありうる。」(新版①182頁、新書版①175頁、原文 117 ページ)

商品に価格を与えるのは、観念的貨幣で十分だが、商品がその所有者にとって一般的等価物の役割を果たすには、現実には商品は金と交換されなければならない。「観念的な価値尺度のうちには、硬い貨幣が待ち構えている」(新版①184頁、新書版①177 ページ、原文 118 ページ)

第2節 流通手段

a 商品の変態

交換過程とは、社会的素材変換である。この交換過程において、商品は、そこに内在する使用価値と価値との対立を外的対立として表わす。外的対立とは、使用価値としての商品と交換価値としての貨幣が交換過程において向き合うということであり、商品は、実在的に使用価値であり、金は、実在的に交換価値である。

ここでわれわれは、買うために売る (W-G-W) という、社会的素材転換の過程を詳しく見てみることにしよう。

まず、W-G. 販売 「商品の命がけの飛躍」 その商品に支出された労働は、社会的に有用な形態で支出されていることが実証されなければならない。また、費やされた労働が価値どおりに実現するとは限らない。注意しなければならないのは、A と B の取引において、B のリンネルが貨幣になる過程は、同時に A の貨幣がリンネルになる過程でもあるということである。

	A 小麦—貨幣—リンネル	W—G—W
G-W 購買	B リンネル—貨幣—聖書	W—G—W
	C 聖書—貨幣—安ウイスキー	W—G—W

A, B, C 3 人の登場人物と 4 つの極、商品流通として現われる。「貨幣は、それが一つの商品の変態系列から最終的に脱落するからといって、消滅するのではない」(新版① 199 頁、新書版①191 ページ、原文 127 ページ)「流通は絶えず貨幣を発汗する」(新版

①199 頁、新書版①192 ページ、原文 127 ページ)

A・・・ G-W (購買)

B・・・ W-G (販売)「自分自身すでに売ったからといって、ただちに買う必要はない。」したがって、この過程は、恐慌の可能性を含んでいる。「お互いに補い合っているために内的に非自立的であるものの外的な自立化が、一定の点まで進むと。統一が強力的に自己を貫徹する——恐慌によって。」(新版①200 頁、新書版 193 頁。原文 128 頁)。商品が過剰で販売されず、商品の価値破壊が行われるということ。「これらの形態は、恐慌の可能性を、とはいえただ可能性のみを、含んでいる。この可能性の現実性への発展は、単純な商品流通の立場からはまだまったく実存しない諸関係の全範囲を必要とする」(同上)。資本主義的蓄積と流通、信用制度等、が検討されなければならないが、この第 3 節貨幣の箇所では、信用の基本についての指摘もなされている。

商品流通の媒介者として、貨幣は流通手段という機能を受け取る。

b 貨幣の通流

W-G-W

W-G-W

W-G-W

諸商品のこの運動は、循環である。しかし、貨幣は循環せず絶えず出発点から遠ざかる。これを貨幣の通流という。「貨幣の運動は商品流通の表現に過ぎないにもかかわらず、逆に、商品流通が貨幣の運動の結果に過ぎないものとして現われるのである」(新版① 203~204 頁、新書版①196 ページ、原文 130 ページ)

流通部面はどれだけの貨幣を絶えず吸収するのかという問題 (新版①205 頁、新書版① 198 ページ、原文 131 ページ)

「商品世界の流過程のために必要とされる流通手段の総量は、すでに諸商品の価格総額によって規定されている」(新版①206 頁、新書版 198 ページ、原文 131 ページ)

貨幣の価値に反比例する諸商品価格、諸商品価格に正比例する流通手段の総量という関係で流通手段の総量が決定される。貴金属の原産地での商品との交換によって貨幣は流過程に入る。貨幣は、与えられた価値をもつ商品として流通に入ってくる。(新版① 206 頁、新書版①199-200 ページ、原文 131-132 ページ)

流通手段の総量←諸商品の価格総額←商品の価格×商品総量 であるが、貨幣の通流速度、すなわち与えられた時間内における同じ貨幣片の通流の回数に、流通手段の総量は反比例する(貨幣片の通流回数が 4 倍になれば、流通手段量は 4 分の 1 になるということ) から

諸商品の価格総額/同名の貨幣片の通流回数→流通手段として機能する貨幣片の総量、

という関係が成立する。貨幣の通流回数が増加すれば、流通手段量は減少するから、流通部面から飛び出る貨幣が生み出され、増加すれば、貨幣が流通過程に投げ入れられる。

$$\frac{P \times Q}{V} \Rightarrow M \qquad \frac{\Delta P}{P} + \frac{\Delta Q}{Q} - \frac{\Delta V}{V} \Rightarrow \frac{\Delta M}{M}$$

マルクスは、商品価格の歴史における重要な組み合わせといている（新版①212～214 頁、新書版①205－207 ページ、原文 135－138 ページ）が、上の式で考えれば全てのケースが理解できる。ここで注意しなければならないのは、貨幣数量説的誤りである。マルクスは、したがって次のような注意を与える。「商品価格は流通手段の総量によって、その流通手段の総量はまた一国に存在する貨幣材料の総量によって、規定されるという幻想は、その最初の唱導者たちにとっては、商品は価格なしに、貨幣は価値なしに、流通過程にはいり、次にそこにおいて、ごたまぜの商品群の不可除部分が山をなす金属の不可除部分と交換されるとかいうばかげた仮説に根ざしている」（新版①214 頁、新書版①207 ページ、原文 138 ページ）このばかげた仮説を貨幣数量説という。貨幣数量説は、貨幣の価値尺度機能を認めないのでこうしたことになる。

c 鑄貨。価値章標

流通手段としての貨幣の機能から鑄貨が生じる。なぜなら、流通手段として実際に商品に相対しなければならないからである。つまり価値尺度機能のように観念的ではありえないからでもあろう。造幣の仕事、つまり貨幣を作る仕事は国家の仕事。

本来、金鑄貨と金地金とは、実体的にも一致していたが、金鑄貨は、通流によって摩滅し、名目と実質が乖離する。ここに、鑄貨にかわって価値章標がつけられる理由がある。鑄貨が急速に通流し、摩滅が激しい領域では、補助鑄貨が使われる。最終的には、金の代わりに紙幣が鑄貨として機能する。

ここでの問題は、強制通用力のある国家紙幣のことであり、信用貨幣のことではない。信用貨幣は、支払手段としての貨幣の機能から生じるのであり、「商業銀行の振り出す手形にその起源を持つ」。

国家によって外部から流通過程に投げ込まれる紙幣、それらが現実に同名の金総額に代わって流通するかぎり、それらの運動には貨幣通流そのものの法則だけが反映する。紙幣流通の独自の法則は、金に対する紙幣の代理関係だけから生じる。現実に必要とされる金分量を超えて紙幣が流通過程に投げ込まれれば、紙幣の代理する金分量が切り下げられるということ。「紙幣の総量があるべき総量の2倍になれば、たとえば、1ポンドは、事実として、約1/4オンスの金の代わりに約1/8オンスの金の貨幣名になる。」（新版①223 頁、新書版216 ページ、原文142 ページ）

最後の問題、「なぜ金はそれ自体単なる無価値な章標によって置き換えが可能なのか？」（新版①224 頁、新書版①217 頁、原文142 ページ） 答え：流通手段という機能は、

価値実体を必要としないから。ただ、金の代理物が通流すれば事足りるからである。

第3節 貨幣

ここで論じる貨幣は、「その機能が、金を、唯一の価値姿態または交換価値の唯一の適当な定在として、単なる使用価値としての他の全ての商品にたいして固定する場合」である。つまり価値尺度のように観念的な存在ではなく、また、流通手段のように価値の代理物ですませるといふわけにもいかないのである。

a 蓄蔵貨幣の形成

W-Gの結果生じたGが不動化すると蓄蔵貨幣となる。交易の全ての地点に、金銀の財宝が生まれる。「金を持つものは、自分の望むことは何でもできる。」価値は価値形態と密接不可分であり、金銀財宝の増加が価値の増加となる。

蓄蔵貨幣の形成の衝動には限度がない。蓄積のシシフォスの労働に追いやられる蓄蔵貨幣者→勤勉、節約。金銀製品を所有し、蓄蔵貨幣とする。

蓄蔵貨幣の第1の機能：商品流通に必要な貨幣を供給し、また、あふれた貨幣を貯めておく機能である。

b 支払手段

売り手が債権者となり、買い手が債務者となる信用関係から生じる。

貨幣の機能①売られる商品の価値規定における価値尺度

②観念的購買手段

③支払期限に達して初めて支払手段は流通に入る。

貨幣は絶対的定在として過程をとじる。

債権債務関係が発生し、決済関係が発達する。債務がうまく決済されない場合、貨幣恐慌が発生する。

「支払手段としての貨幣機能は、一つの媒介されない（直接的）矛盾を含んでいる。諸支払いが相殺される限り、貨幣はただ観念的に、計算貨幣または価値尺度として機能するだけである」（新版①240 頁、新書版①233 頁、原文 151 頁）→とういことは、信用は貨幣支払いを排除するということであり、支払手段も必要はないということを行っている。

「現実的支払いが行われなければならない限りでは、貨幣は、流通手段として、すなわち素材変換のただ一時的媒介的な形態として登場するのではなく、社会的労働の個別的な化身、交換価値の自立的な定在、絶対的商品として登場する」（新版①240～241 頁、新書版 233 頁、原文 152 頁）→とういことは、信用が崩れ支払いを実際に行わなければならない場合、それは、貨幣そのもの、つまり支払い手段が要求されるのであり、堅い貨幣の必要が生じるのだ。

「この矛盾は、生産恐慌・商業恐慌中の貨幣恐慌と呼ばれる時点で爆発する。貨幣恐慌が起きるのは、諸支払いの過程的な連鎖と諸支払いの相殺の人為的制度とが十分に発達している場合だけである」(新版①240 頁、新書版 233 頁、原文 152 頁) →ということは、マルクスは、ここで、信用制度が十分発達し、生産と商品販売が信用膨張の下で拡大し、しかし、その信用が崩れる場合の貨幣恐慌を問題にしているということであり、(注 99) に書いてあるように、商工業とは直接関係のない、銀行、取引所、財界をその直接の部面とする恐慌と区別していることに注意しよう。だから、『資本論』第 3 巻の信用制度を論じなければ、本来語ることのできない貨幣恐慌についてマルクスは、もうすでにこの段階で論じている。しかし、支払手段という貨幣の機能を論じるには、信用制度を前提にしなければ、論じることができないので、こうした叙述になっていることに注意しよう。

「この機構の比較的全般的な攪乱が起きれば、それがどこから生じようとも、貨幣は、突然かつ媒介なしに、計算貨幣というただ観念的なだけの姿態から堅い貨幣に急変する。それは卑俗な商品によっては変わりえないものになる。商品の使用価値は無価値になり商品の価値はそれ自身の価値形態をまえにして姿を消す」(新版①240 頁、新書版 233 頁、原文 152 頁) →ということは、信用機構が崩壊し、信用が通用し、貨幣の必要ない取引が通じなくなれば、債務の決済には、実際の貨幣が必要だし、商品は販売されず、商品の使用価値がなくなればその価値も消滅するということになる。

「つい先ほどまで、ブルジョアは、繁栄に酔いしれ、蒙を啓くとばかりにうぬぼれて、貨幣などは空虚な妄想だと宣言していた。商品だけが貨幣だ、と。ところがいまや世界市場には、貨幣だけが商品だ！という声が響き渡る。鹿が清水を慕いあえぐように、ブルジョアの魂も貨幣を、この唯一の富を求めて慕いあえぐ」(新版①240~241 頁、新書版①233~235 頁、原文 152 頁) →ということは、信用が通用している間は、貨幣はいらないから、貨幣は空虚な存在となるが、一旦信用が崩壊すると、支払手段としての貨幣が追い求められるということ、「信用主義から重金主義へのこの突然の転化は、実際のパニックに理論上の恐怖を付け加える。そして、流通当事者たちは、彼ら自身の諸関係の見すかしのない神秘の前に震え上るのである」(カール・マルクス著『経済学批判』全集 13 巻、124~125 頁)。

「恐慌においては、商品とその価値姿態である貨幣との対立は絶対的矛盾にまで高められる。それゆえにまた、この場合には貨幣の現象形態は何であろうとかまわない。支払いに用いられるのが、金であろうと、銀行券などのような信用貨幣であろうと、貨幣飢饉は貨幣飢饉である」(新版①240~241 頁、新書版 234 頁、原文 152 頁) →ということは、恐慌においては、商品の価値はゼロ、貨幣だけが価値となるが、この場合の貨幣は、金本位制下のこの時代においてもマルクスは、金である必要はない、銀行券でもいいといっている、つまり、貨幣恐慌は、銀行による信用貨幣の投入によって乗り切ることができることを指摘している。

資本主義社会では、信用によって取引される量が膨大だから、実際に必要とされる貨幣

つまり現金は、どんどん小さい比率となる。

「信用貨幣は、売られた商品にたいする債務証書そのものが債権の移転のために再び流通することによって、支払手段の機能から直接的に生じてくる。他面、信用制度が拡大するにつれて、支払手段としての貨幣の機能も拡大する。このようなものとして、それは、大口取引の部面を住みかとする独自の実存諸形態を受け取り、これにたいして、金鑄貨または銀鑄貨は、主として小口の取引の部面に押し戻される」(新版①243 頁、新書版236 頁、原文154 頁)→手形小切手が現金に代わって取引の大半を占めるようになる。とりわけ大口取引ではこうした傾向が強いから、具体例として、マルクスは、当時最大の商社の一つ、モリソン・ディロン商会の取引表を示している。貨幣の支払手段機能から直接生じる、信用貨幣を論じ、信用制度の拡充による手形・小切手による取引が、大口取引では一般化されるから、現金は必要がだんだんなくなる。

地代、租税などの貨幣支払→農民の窮乏をもたらす。日本農業への言及→現物地代が貨幣地代への転化が日本の模範的農業をつぶすといっている。

支払手段の総量は支払期限の長さに正比例する。長さが2倍になれば支払総量も2倍ということ。

支払手段の準備金としての蓄蔵貨幣は増加する。

c 世界貨幣

貨幣は、国内の流通部面から外へ出るとともに貴金属の地金形態に逆戻りする。当時は金と銀が世界貨幣だったが、銀の価値の下落とともに、金がその地位を奪う→国際金本位制が、19世紀のイギリスによって、各国に広げられる。

世界貨幣の機能①一般的支払手段②一般的購買手段③普遍的富一般

「国際収支の差額を決済するための、支払手段としての機能が、[他の機能に]優先する。それゆえに、重商主義のスローガンは言う——貿易差額を！」(新版①250 頁、新書版244 頁、原文157~158 頁)→つまり、貿易黒字になると自国通貨への需要が増大し、自国通貨の為替相場が上昇するので、外国人は、自国の高い通貨を買わないで、自国に金を送金する、したがって、自国に金が流入するということになる。貿易赤字になると外国通貨への需要が増大するから、外国通貨の為替相場が上昇するので、本国人は高い外国通貨を買わずに外国に金を送金するから自国から金が流出するというのが正論。

ところが、リカードや通貨学派の経済学者、現在ではマネタリストがそうだが、金が自国に流入するのは、自国の流通手段が過少で、物価が下落し、自国通貨価値が上昇し、自国通貨の為替相場が上がるので、外国人は、その高い自国通貨を買わずに、金で支払いをするから自国に金が流入する。また、金が自国から流出するのは、自国の流通手段の過剰によって、物価が上昇し、自国通貨価値が下落し、自国通貨の為替相場が下がり、

外国通貨の為替相場の上昇がおこるから、邦国人は、高い外国通貨を買わずに、外国に金を流出させると理解した。

世界市場のための準備金の必要、それは金銀でなければならない
金銀の流れ①金銀の生産地から世界市場全体

②国民経済間を絶えず往復する（為替相場の後追い）

ブルジョア的生産が発展→銀行に大量に集積される蓄蔵貨幣は、最小限まで制限される。
なぜなら、銀行は、ブルジョア的生産を発展させるために貸付を行い、蓄蔵貨幣を最小限に抑えるから、ということは、蓄蔵貨幣が銀行に大量に存在するということは、商品流通が停滞していることをしめすものだ。

新版『資本論』第1巻講座第3講義付属資料：アダム・スミスの価値論・貨幣論

アダム・スミス著、大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』岩波文庫、1959年より

第1編 労働の生産諸力における改善の諸原因について、また、その生産物が人民のさまざまな階級のあいだに自然に分配される秩序について

第1章 分業について

分業は労働の生産諸力を増進させる大原因であり、このことは、特定の例をとればいっそうよく理解できるのであって、たとえば、ピン製造のばあいがそれである。

その効果は、すべての職号において同様であり、仕事の分割についてもまたそうである。その利益は3つの事情に起因するのであって、(1) 技巧の改善と、(2) 時間の節約と、(3) 職人が発明した機械類の応用、または機械製作者や哲学者が発明した機械類の応用、がこれである。

それゆえ、統治がよく行き届いた社会は普遍的に富裕であり、日雇労働者の上衣さえ無数の職人の生産物である。

第2章 分業をひきおこす原理について

分業は人間の本性のなかにある交換性向から生じる。この性向は人間だけに見いだされる。この性向は利己心に刺激されて分業へ導き、このようにして、生得の差異よりもいっそう重要な差異が才能に生じ、その結果、こういう差異を有用なものにする。

第3章 分業は市場の広さによって制限されるということ

分業は交換力の大きさによって制限される。いろいろな職業は都会以外では営めない。

水運は市場を拡大するから、最初の諸改善も海岸方面か航行可能な河川かでおこなわれたのであって、地中海沿岸における古代諸国民のあいだでの実例もそうである。諸改善は、最初はエジプトとベンゴールとシナでおこなわれたが、その反面、アフリカ・タータリおよびサイベリアも、またパヴァリア・オーストリアおよびハンガリーも、後進的である。

第4章 貨幣の起源および使用について

分業が確立されると、あらゆる人は交換することによって生活する。**物々交換が困難であるために、一商品が貨幣として選ばれたのであって、たとえば、家畜・塩・貝がら・たら・タバコ・砂糖・なめし皮およびくぎ、がこれである。**耐久的で可分的であるために、ついに金属が選考された。鉄・銅・金および銀が、最初は刻印を押さぬ棒金のままで使用され、その後、重量や品位を示すために刻印を押すようになり、また、刻印は純分を表示するものが最初に導入され、そのあとになってから、重量を表示する鑄貨制度が導入された。

鑄貨の名称は、本来、その重量を表現するものであった。

つぎの研究は、どのような諸法則が交換価値を決定するか、である。

価値とは、交換価値または使用価値のいずれかを意味する。

3つの問題、すなわち、(1) 諸商品の実質価格はどのようなものに存するか、(2) この価格の異なる諸部分はどのようなものであるか、(3) なぜ市場価格はときどきこの価格から離反するか、(4) 以上の3つの問題は、つぎの三つの章(5, 6, 7章)で答えられるであろう。

第5章 諸商品の実質価格および名目価格について、すなわち、それらの労働価格および貨幣価格について

労働は、交換価値の実質的尺度であり、またいっさいの物に支払われる最初の価格である。富は労働を購買する力である。しかし、労働を測ることは困難であるから、価値はふつう労働では評価されないし、それに、諸商品は、労働と交換されるよりも、いっそうしばしば他の諸商品と交換される。とくに貨幣と交換されるから、貨幣はいっそうしばしば価値を評価するために用いられる。しかしながら、金・銀の価値は変動し、ばあいによっては労働が多く費やされたり、すくなく費やされたりするのに、等しい労働は、労働者にとってはつねに等しい犠牲を意味するのであるが、それにもかかわらず雇い主は労働の価値は変動するものとみなしている。

このように考えると、労働は実質価格と名目価格とをもっている。実質価格と名目価格とを区別するのは、ばあいによっては実用的であって、そのわけは、鑄貨中の金属の量は減少しがちであるからであり、また、金・銀の価値も下落したからである。

貨幣で留保されていたイングランドの地代は、1586年以來四分の一に下落し、同様に、スコットランドやフランスの地代はほとんど無価値になった。穀物地代は、貨幣地代よりも安定的だが、年々の変動から影響を受けることがはるかに大であり、したがって、労働は唯一の普遍的標準である。

しかし、通常取引には貨幣で十分である、というのは、貨幣は、同一のときとところでは完全に正確であるからであるが、遠隔地間の取引のばあいには、考慮すべきことがただ一つある。それゆえ、貨幣価格のほうが注意を払われてきたのはすこしもふしぎではない。本書においては、ときには穀物価格が用いられる。

いくつかの金属が、貨幣に鑄造されたが、そのうちの一つだけが標準として使用され、しかもこの一つは通例商業に使用されたのであって、たとえば、ローマ人は銅を使用し、また、近代ヨーロッパ諸国民は、銀を使用した。標準金属が本来唯一の法貨であって、その後、この二つの金属の価値の割合が法律によって告示され、両者は法貨となり、両者の区別は重要でなくなったが、規制された割合が変化すれば別である。規制された割合が存続する間は、大ブリテンのばあい、そうであるように、もっとも貴重な金属の価値が全鑄貨の価値を規制するのであって、大ブリテンでは、金貨の改鑄が銀貨の価値を引き上げた。イングランドでは、銀はその価値以下に評価されている。銀地金の高価格についてのロックの説明は誤りである。もし銀貨が改鑄されれば、それは溶解されるであろう。銀はいっそう高く評価されるべきであるが、それをIギニ以上の法貨にしては

ならない。もし適切に評価されれば、銀地金は改鑄しなくても造幣価格いかに下落するであろう。造幣手数料は、溶解を防止し、輸出を阻止するであろう。金・銀の市場価格の波動は、通常の商業的諸原因に由来するが、それが鑄造価格からいつまでも離反したままになっているのは、鑄貨の状態に由来するものである。財貨の価格は鑄貨の実際の内容に適応させられる。

第6章 諸商品の価格の構成部分について

労働の量は、本来、価値の唯一の定規であるが、はげしい辛苦は、斟酌されるし、非凡な技巧や創意もまた斟酌される。この当時には、全生産物は労働者に属していたが、資財が使用されるようになると、企業家の利潤に対してなにもものが与えられなければならないから、所産の価値はそれ自体を賃銀と利潤とに分解する。利潤は単なる監督や指揮の賃銀ではない。労働者は、雇い主と生産物を分け合うのであって、こうなると、もはや労働だけが価値を規定しなくなる。土地がすべて私有財産になると、地代はたいの商品の価格の第三の構成部分をなすようになる。**三部分のすべての実質価値は労働によって測られる**。進歩した社会では、三部分のすべてが一般に存在するのであって、たとえば、穀物においてそうであり、小麦粉またはひきわりにおいてもそうであり、さらに亜麻においてもそうである。高級な製造品においては、地代の割合は比較的小である。

少数の商品は三つの構成部分のうちの一つまたは一つしかもたない。しかし、いっさいの商品の価格は、少なくともその一部分をもたなければならないし、また、**年々の全生産物の価格は、賃銀・利潤および地代にそれ自体を分解するのであって、以上の三つだけが収入の本源的な種類である**。これらの収入は、ときどき混同されるのであって、たとえば、地主的農業者の地代は、利潤と呼ばれるし、また、ふつうの農業者の賃銀は利潤と呼ばれるし、さらに独立の製造業者の賃銀もまたそうであるが、その反面、自分自身の土地で栽培する庭師の地代および利潤は、その労働の稼ぎと考えられている。

年々の生産物の大部分は怠け者の手にわたり、この割合が生産物の増減を規定する。

第7章 諸商品の自然価格および市場価格について

賃銀・利潤の通常率または平均率や、地代の通常率または平均率は、自然率と呼んでも差し支えないものであって、この自然率で支払われるばあい、商品はその自然価格で売却されるのであり、つまり、それは実際に費やされただけに売られるのであって、それには利潤が含まれている。というのは、利潤なしに売り続ける人は誰もいないからである。

市場価格は、市場へもたらされる量と自然需要とによって規定される。もたらされた量が有効需要におよばないばあいには、市場価格は自然価格以上に上昇するが、それが有効需要を超過するばあいには、市場価格は自然価格いかに下落し、それがちょうど有効需要に等しい場合には、市場価格と自然価格は一致する。

この量は、自然にそれ自体を有効需要に適合させる。この量が有効需要を超過するばあいには、その価格の構成部分のあるものは、自然率をしたまわすが、この量が有効需要

におよばないばあいには、その価格の構成部分のあるものは、自然率をうわまわる。自然価格は、それを中心として実際価格が引き付けられる中心価格である。

勤労はそれ自体を有効需要に適合させるが、所与の勤労によって生産される量は、ときどき波動する。市場価格の波動は、地代よりも賃銀や利潤にいつそう多くの影響を及ぼすが、その影響の割合は、諸商品や労働の供給によって異なる。しかし、市場価格が長期間自然価格をうわまわったままのこともありうる。それは、高利潤について一般が知っていない結果か、または製造業上の秘密の結果であって、この場合には長期間作用することもありうるし、それが特殊の土壌の払底の結果であれば、永続することもありうる。

独占は商業上の秘密と同一の効果を与え、独占価格は、獲得しうる最高のものである。同業組合の諸特権等々は、拡大された独占である。市場価格が長く自然価格をしたまわることにはめったにない。とはいえ、徒弟修業や同業組合の諸規約が、一定期間賃銀をはるか自然率以上に引き下げておくことがある。自然価格は、賃銀・利潤および地代の自然率とともに変動する。